昭和四十八年度

春季公開講演会要旨

東洋学における大谷大学の貢献

文学博士
日本学士院会員　神田喜一郎

ただいまご紹介にあずかりました神田でございます。本学には随分と旧くから関係がございまして、こんかい何か昔の思い出話でもするようにと学会の方から仰せつけを蒙りましたが、久しく講演といったものを致しておりませず、こうして演壇に立つのは十数年ぶりのことでもあり、おまけに大分と老境に入っておりまして十分なお話もできないと思います。「東洋学における大谷大学の貢献」といういかめしい題を出しておきましたけれども、左様なわけで、全く老人の昔話という程度にお聴きとり下さるようお願い致しとうございます。それから東洋学と申しましても、本学のことでありますので、しぜん仏教のことになりますが、私は仏教信者ではあっても仏教学者ではありませず、したがってその点また何かとおきき苦しいことも多かろうと存じます。その辺のところもあらかじめおことわり致しておきまして、これから暫くご静聴下さるようお願い申します。

私が始めて本学にご厄介になりまして教壇に立ちましたのは大正十年、一九二一年のことで、その頃本学は真宗大谷大学と称し、学長は南条文雄先生でございました。南条先生は申すまでもなく、わが国の仏教学研究の上に劃期的な大功績を遺された一大碩学であります。わが国に仏教が伝来致しましてからのち、南条先生がお出ましになるまで千数百年になるかと思いますが、その間の仏教研究というものは、すべて漢文に翻訳された漢訳仏典を基礎としたものでありました。ところが南条先生が出られて、はじめてサンスクリットの原典による仏教研究が本格的にわが国で開かれたのであります。

先生は明治九年に東本願寺の命令で、サンスクリットの仏典を研究する目的でイギリスへ行かれ、それから明治十七年に帰国されるまであしかけ九年間、イギリスでサンスクリットの原典をご研究になったのであります。先生の自叙伝を拝見致しますと、日本を出発される時は、全くアルファベットさえもご承知なかったということであります。その時一緒にイギリスへ同行された方に笠原研寿という先生がありましたが、この方が南条先生よりいくらか若く、アルファベットをどうにか知っておられるという程度に過ぎなかったのでありますが、その二人が相携えてイギリスへサンスクリット研究のために渡られたのでありますから、まことに大胆、驚くべきことであったと申さねばなりません。しかしそれを敢行されたところに両先生が当時いかに新しい仏教研究の意気に燃えておられたかということがわかるのであります。本当に身命を賭して勉強してこようという熱情をもって出かけられたと思うのであります。

両先生はイギリスへ着かれ、ロンドンで二年間まず英語を勉強

されました。そしてだいぶん英語がよくわかるようになって、はじめてオックスフォードの大学に於て当時比較言語学を教えていた Max Müller という碩学についてサンスクリットの手ほどきを受けられたのであります。そののちのお二人の猛勉強は実に大変なものであったろうと思われます。私はサンスクリットというものを全く存じませんが、日本人にとってこれほど難かしい入りにくい言葉はないと聞いております。

ところが南条、笠原両先生はあちらに行かれて始めてこの難しい言葉を習われ、しかも一年そこそこでそのむつかしいサンスクリットをちゃんとマスターされたのであります。明治十二年に Max Müller の所へ行かれて、始めてサンスクリットの手ほどきを受け、その翌十三年には日本から取寄せられた「阿弥陀経」のサンスクリットの原典を、ローマ字に書き直すという仕事をせられているのであります。これは Max Müller の英訳を附して、アジア協会の雑誌に載せられました。実に驚くべき成果であります。その猛勉強のせいで笠原研寿先生は、とうとう病気のために、日本に帰られ、まもなく亡くなりました。そのあと南条先生一人が Max Müller の所にのこられ、引続いていろんな仕事をせられました。その代表的なものが「南条目録」であるということはいうまでもありません。これは明治十六年にオックスフォードの大学から出版されたものであります。これより前、日本からイギリスの政府へ黄檗版の一切経を寄附致しました。その一切経の目録でありますが、単なる目録ではありません。その一一の書物の題名を全部サンスクリットに翻訳されておられるのです。原典が残っているものなら割に簡単ですが、原典が残っていないものが十中の九まであるのを、全部もとのサンスクリットになおされて、この目録を作られたのであります。しかも翻訳者の伝記までも、「高僧伝」その他によって詳しく英語で付け加えられてある。それが明治十六年にちゃんと出来上ってオックスフォードから出ておるわけです。明治十二年に始めてサンスクリットのいの一番から習われて、明治十六年にはこんな立派な目録がもう出来上っていることは、実に驚くべきことだと思います。先生の伝記にはただ明治十六年に三蔵聖教目録を英訳して出版したと、そう書いてあるだけで何でもないことのように思えますが、事実は大変なことであります。これほどの大事業を短時日の間に完成なされておることは実に偉いと申さねばなりません。

先生はこの他に、滞英中に「法華経」とか「楞伽経」とか「金光明経」とかのサンスクリット原典を、イギリスあるいはパリのビブリオティーク・ナショナルから探し出され、それを写して日本に持帰っておられるのであります。そしてそれを先生が帰国ののち徐々に校訂されて出版されております。例えば「梵本法華経」ですが、オックスフォードにある「法華経」の原典を苦労して写してかえられたのを、オランダの Kern というインド学者と共同で出版されたこともあります。これはロシアのペテルブルクで明治四十一年から四十五年までかかって出ております。ところでこの原典を単にノートにとって持って帰られたといいますと、これまた何でもないことのように考えられますが、古写本とか古版本を写すということは容易なことではありません。私は中国の

古い写本とか版本をたえず取扱うておりますが、その経験から申しますと、古写本には書きまちがいがありますし、途中で切れております個所はありますし、竄入がありますし、古写本の校合は大変骨の折れることで、根気を必要と致します。この南条先生のサンスクリット法華経の校合も恐らくそのようなものであったろうと思うのであります。かようにして「法華経」の原典を出版された先生は、先生の門下でまた本学の教授でもありました泉芳璟先生と共同で、のちに和訳して「和訳梵文法華経」というものを出しておられます。その最初の所に、南条先生が写して帰られた原本の写真が載っておりますが、それを見ますと先生の細い注が非常に沢山ついております。泉先生がそこに古写本の校合の骨の折れることはこの通りだと書いておられますが、全くその通りと存じます。以上申述べました南条先生のお仕事は、直接にこの大谷大学と関係はないかも存じませんが、しかし広い意味におきまして大谷大学の東洋学における大きな貢献と申して差支えないと思います。ことにまた先生の古稀の祝賀の為に「梵文入楞伽経」が大谷大学から出版されておりますが、これなどは大谷大学の直接の貢献と申して決して差支えありません。

南条先生の事が長くなりましたが、私が本学にご厄介になりました大正十年頃、この大学には非常に活気が満ちていました。そういう雰囲気の中へ講義に出講しました私はそれに深い感銘を覚えたことでありました。そのころ仏教の研究は原典によらなくてはならないという運動が、ほうはいとして起っておりまして、それには梵巴西というのが合言葉みたいになっておりました。これは梵巴蔵といったほうが良いかと思いますが、つまり梵語とパーリ語とチベット語であります。そういうものによって原典から究めねばならんという運動であります。そのはたがしらになっておられたのが佐々木月樵、赤沼智善、山辺習学の諸先生であったように存じました。

佐々木月樵先生は、南条先生のあと学長になられましたが、当時華厳のことをご研究になっておりまして、「日本文化教典」という名前で「華厳経」のあちこちを非常にわかり易く、読みよいような体裁で出版されました。最初に出ましたのが「夜摩天宮会及其解説」という書物であります。それから次は「華厳聖歌」、その次は「九夜神と仏妃」という書物であります。ここに持参いたしました。もうすでに五十年も経過しておりますので、少し色も褪せておりますけれども、そのころいままでの仏教の書物とは感じの違った、こんなスマートな仏典があるのかと思う位スマートな体裁のものでありました。「夜摩天宮」というのは華厳の七処八会と申しますか、そういう会座の一つであります。私は華厳のことをよく存じませんが、そこで行われたお説法が「華厳経」にあります。そこを特に抽き出されたのであります。「華厳聖歌」というのは、「華厳経」の中にありますいろんな偈頌を分類されて訳をつけられ、後に原文がすべて出ておるのであります。しかもそれに甚だ詳しい訓点が付せられ、素人にも読み易いようにできています。そしてこういうものを陸続と出版され、三冊ほど出ました。私などわからずながらに読ましていただき大きな感化を受けました。佐々木先生はそういう風に華厳を一方でご研究になりますとともに、

一方では「中論」のご研究に大変お骨折りであったように思います。それは先生に一つのお考えがあったらしいので、インドの仏教というものは龍樹が出てその頂点に達し、龍樹というものがインド仏教を代表するのだ、そしてその龍樹の著作の中で「中論」が最初の龍樹の学説で、「華厳経」を裏付けとした「十住毘婆沙論」が最後のものであるというお考えであったように承わりました。この辺のことは間違っているかも存じませんが、ともかく先生は華厳と共に、一方では「中論」をご研究になっておったようであります。私も実は大正八年、京都大学の学生の頃でありますが、西田幾太郎先生がおられ、当時実情はよく存じませんけれども、佐々木先生に京大へ来ていただいて、私的に仏教の講義をしてもらうということになって、その講義がありました。私は哲学科の学生ではありませんが、誰でも拝聴したいものは来てよろしいということでその講筵に出ました。西田先生と朝永三十郎先生とは毎回必ずお出ましになっておられました。大体十四、五回ありましたでしょうか、そのとき教科書に用いられたのが「中論」で不生・不滅・不常・不断・不一・不異・不来・不去という八不中道ということを色々お話いただきました。「中論」の本当のお話は私にわかるわけはないのでありますが、佐々木先生は非常に話上手なおかたでして、むつかしいことを私などにもわかり易く、色々な挿話を入れてお話になりました。摩登伽という女が美男子の阿難を誑かしたという「摩登伽経」の話などをおもしろくお話しになって、これを芝居にしたらおもしろいんじゃないかというようなことを仰言ったことを覚えております。そんな風で、佐々木先生はこの龍樹の「中論」をご研究になっておられましたが、このご研究がそののち「龍樹の中論及びその哲学」という書物となって出ました。私も「中論」のご講義を承ったものですから、大正十四年に世に出たこの書をいまも手許において、ときどき拝見しております。この中にはインドの月称、すなわちチャンドラキールティの書いた「中論」の註釈をそのころベルギーのガン大学の Poussin 教授が翻訳したものなどご参考になっておりまして、従来の三論学者がやります古い伝統をうけた中論の解釈ではなく、大変に新しいものであります。そういうことでは佐々木先生はまた「唯識二十論」の対訳研究をおやりになりました。おそろしくむつかしいものでありますが、昔の法相宗の伝統によるものではなくて、原典によって研究されることに非常に力を入れられました。先生は大正十五年春に突然お亡くなりになりましたが、私が丁度本学へご厄介になりました頃はその研究を熱心におやりになっていた時であります。

それに対して赤沼智善先生は、大正八年と思いますが、イギリス留学から帰られ、実に意気颯爽たるものでした。当時イギリスの政治などについて、熱弁をふるわれたのを承ったこともあります。先生はセイロンで Ñāṇissara 僧正という人についてパーリ語をご研究になりました。これも私の当時の思い出でありますが、佐々木先生の華厳の三冊の書物が仏教の本として実にスマートな形で出ましたのと同じように、大正十年に赤沼先生は「阿含の仏教」という本をお出しになりました。この書物はまた実に劃期的なもので、装釘のすばらしいのに驚いたものであります。堂々たる本

で、こんな立派な書物は当時どの方面にも一寸なかったものです。天金というのはありましたが、三方金というのはなかったのです。定価拾円、当時の本は大体壱円とか壱円五拾銭というのが普通でありましたが拾円とは大変な本であります。しかもその本文の組み方が、一方には漢文の阿含を、その対応頁にはその英訳を組むという風で、その点も劃期的なものでした。しかもそれを当時の本学の予科の教科書としてお出しになっておる。学部の教科書では一体どんなものになるのかしらと思わせるほど、非常にえらい本でした。そののち昭和になってから「漢巴四部四阿含互照録」とか、「印度仏教固有名詞辞典」とかをお出しになりました。いずれも大変なご労作であります。

このうち「漢巴四部四阿含互照録」でありますが、ご承知の通り阿含というものは、漢訳では長阿含、中阿含、雑阿含、増一阿含という四部に分れております。それをパーリ語の原典と非常に詳しく対照されたものであります。昔、明治三十年代にこういう仕事を東京の姉崎博士がなされたものがありますが、それと赤沼先生のとは少しやり方が違っております。姉崎先生のは英語で書いてあります。甚だ入手しにくい珍らしい本で、パーリ語専門家の赤沼先生でもその本をはじめは入手できずに、自分独自の方法で作ったのであるといっておられます。小乗仏教をおやりになる方は是非備えておかねばならない世界的な価値のある本であると承っております。西洋人の本を見ておりますと「印度仏教固有名詞辞典」とともにこの本の名がよく出てまいります。先生はこの「漢巴四部四阿含互照録」を恩師の Ñānissara 僧正に捧げられておりますが、これがいかに先生の骨折られた労作であったかがわかります。そのころの赤沼先生のご勉強というものは大変なものであったと存じます。これはみな大谷大学が産んだ学者達の世界的な偉業であり、不朽の名著だと思うのであります。

次にチベット語でありますが、このチベット語の研究ということになりますと、大谷大学にはチベット語の大蔵経があるということがなんといっても大きな強みであります。これは明治三十三年に寺本婉雅先生が北京から将来され、この大谷大学に寄附せられたものであります。チベット語の大蔵経というものは色々ありまして、ナルタン版とかデルゲ版とかいうものがありますが、大谷大学にあるのは北京版であります。これは清朝の康熙帝が出版した豪華本で、その中には他のチベット大蔵経に入っていないものもあります。チベットの仏教には紅帽派と黄帽派という二派がありますが、黄帽派の元祖で、偉い学者でありますツォンカパの全書とか、その先生になりますチャンキャの全集とがついておりまして、大変に貴重なものであると承っております。チベットの大蔵経はタンジュルとカンジュルとの二部に分れますが、そのカンジュルの部分の目録のみが昭和の初頃にこの大谷大学で出版されました。これは単なる目録ではなく、「勘同目録」であります。主として桜部文鏡さんがおやりになったのだと承っておりますが、チベット蔵経にある本を一つ一つ漢訳ではどれに相当するか、またパーリ語蔵経ではどれに相当するか、それからこの本に関する異同はどうか、巻数の相違はどうかなど他の色々の蔵経まで比較して詳しく注記されております。これまた世界的に誇る

べき業績と存じます。このカンジュルの目録のみが昭和の初にでき、タンジュルの方は終戦後になってつい前年に一冊できました。承りますと今後このようなものが十冊ほど出来るそうでありますが、完成しましたら大変なことであります。それからチベットの蔵経の他に、色々なチベットの本を寺本先生がお持ち帰りになり、蔵外の本ということで、寺本先生以外まだ誰も手をつけないで大谷大学に置いてあったものがありまして、数年前から本学の図書館でそれの目録を作られ、つい数日前に完成をみるに至りました。かようにチベットのものが本学に沢山あるということは、世界に誇ってよいことで、どこにもこれほどチベットの資料を持っている所はないと思います。佐々木月樵先生がチベットの蔵経を利用することにつき、やかましく言われた大正十年前後から、この大学ではチベット蔵経を利用する学者が多くなり、いろんな業績が発表されました。佐々木先生ご自身が「中論」とか「唯識二十論」などの研究に利用なさっておりますし、チベットの文献を利用することが興ってまいりまして、それを熱心に実行せられたのが山口益先生であります。

山口先生のことは皆さまもよくご承知と存じますので、ここでは省略させていただきますが、私の本学にご厄介になっておりましたころの旧い出来事をただ一つだけお話いたしたいと存じます。インドの六派哲学の一つに正理学派というものがあります。その正理学派がいつごろから興ったのかということについて、当時宇井伯寿博士が龍樹以後じゃないか、という見解を発表されました。ところが山口先生がチベットの蔵経を色々お読みになっているうちに、龍樹の論の中に明かに正理学派の説から発していると思われるものがあるので、宇井博士が考えておられるよりも古いものではないだろうか、ということを発見されました。当時私がごく懇意にしておりました橋川正君、ここの教授をしておられた日本歴史の専門家であります。この橋川君が山口さんの偉い発見にみな驚いているというようなことを話されたことがいまだに私の耳にのこっております。私はこの方面のことを全く存じませんので、あるいは記憶の誤もあろうかと存じますが、ともかくだんだんチベット蔵経というものが利用されて、山口先生のような立派な学者が出られることになったのであります。

つぎに梵語の方面についてでありますが、大正の中期頃からサンスクリットの研究の傾向が大分変ってきたと思うのであります。この大学には南条先生の直門の泉芳璟先生が梵語の講座を担当せられ、南条先生が西洋で写して持ち帰られた文献を、そのまま埋れさせてはいけないと献身的に整理され、続々と梵漢対照の「金光明経」とか「楞伽経」、それから「法華経」などを出版されました。これは大変な功績でありますが、一方においてこの京都の土地では梵語の研究というものが少し方向を変えてきたように思うのであります。日本の梵語学というものは大体 Max Müller のイギリス流のものが最初に紹介され、それについで当時はドイツ領であったストラスブルクの大学の Leumann という梵語学者の別系統の梵語学が移入されました。ところが大正の半頃あたりから殊に京都の地ではフランス流の梵語学が栄えてまいりました。それを伝えられたのは榊亮三郎先生であります。先生は明治

の末、フランス留学から帰国され、京都大学で梵語梵文学の講座を開かれました。この大谷大学へも講師でおみえになっておりました。かようにして明治の末からフランス流の梵語学が入ってきたわけであります。

フランスの梵語学というのは、長い歴史をもっているものであります。Chezy という人が一八一五年にコレジュ・ド・フランスで始めてその講座を開くことになりました。詩人肌の人で、カーリダーサに感激して、梵語の研究をはじめたということであります。その次に梵語の講座を受けもったのが有名な Burnouf という偉い学者で、全く語学の天才であります。当時イギリスの Hodgson という外交官がネパールで梵語の仏典を発見いたしました。それまで梵語の仏典というものは日本に旧くから伝わっております僅かなものしか全く無かったのです。それを Hodgson が発見したのでありますが、この梵語仏典をいまヨーロッパで読める人はフランスの Burnouf をおいてはないということで、気前よく Burnouf の研究に提供しました。Burnouf はそれに感激して、それと一生懸命とり組みました。そうして出来上ったのが「法華経」のフランス訳であります。まことに学界の美談だと思います。それから Burnouf はもう一つインド仏教史を書きました。ともに今日でも専門家の間に重要文献として使用されているようであります。こういう天才学者が出まして、ヨーロッパで始めて大乗仏教を研究し紹介致しましたし、またかれが出てからだんだんフランスでこのサンスクリットの原典による仏教研究が盛んになりまして、近年の Sylvain Lévi までずっと継承されてきているのであります。

フランスのインド学者に Masson-Oursel という人がありますが、その書いたものの中に、サンスクリットによる仏教の研究はフランスが第一であるとあります。Burnouf から Sylvain Lévi に至るまでずっと偉い学者が続いている。むろんイギリスやドイツにも偉い学者が出て立派な成績を挙げてきているけれども、それはパーリ語による研究であって、それは Senart の "Essai sur la légende du Buddha" と Oldenberg の "Le Buddha" とを対比すればよくわかるであろうと申しております。実際、サンスクリットによる仏教研究は、フランスが本家でありまして、Max Müller なども最初はフランスでサンスクリットを勉強した人であります。このフランスのサンスクリット研究は単に梵語だけではなくチベット語の仏教文献と常に比較検討し、それから漢訳の仏典をも利用するという点に大きな特色があります。Burnouf にしてもチベット語を利用するという方面では Froucaux というチベット学者の助をかり、中国学の方では Rémuzat という有名な学者に相談しております。Sylvain Lévi には中国学者の Chavannes, Pelliot がおりました。またこれらの中国学者も梵語学者の助力を得ていろんな成績を挙げているのであります。Rémuzat の「仏国記」の訳とか、Julien の「大唐西域記」の訳、漢訳仏典によるアヴァダーナの研究、Chavannes の「六度集経」や「大唐求法高僧伝」の訳など、皆そうですべてチームワークをなしてできたものと存じます。日本ではこうした傾向が薄く、私は残念に思っております。漢学をやっておる者と、仏教の

学者とがもう少し手を握って研究をしたらどうかと思うのであります。日本では林羅山、伊藤仁斎とかいう人がみな排仏論者で、その影響をうけて、江戸時代からこんにちに至るまで漢学者は仏典を読みません。これは残念なことであります。少し話がそれましたがフランスの学風が榊先生によって日本に紹介移入されてから、この大谷大学ではサンスクリットの原典とチベット語のものとを対照して研究することが特に盛んになったように存ずるのであります。

以上申しあげましたことは、東洋学とは申しましたけれども、大要はわが国の仏教研究がおいおいインド学的になったということを多く取上げて申しあげたわけであります。しかし漢訳仏典というものも決してつまらぬものではありません。中国、日本で漢訳仏典を基礎にして発達した天台大師の天台宗とか、賢首大師の華厳宗とか、あるいはまた親鸞聖人が開かれた真宗とか、そういう仏教は、非常に立派な価値をもっているものであります。しかしこれをただ昔の先学の通りに繰返しているだけでは世界の東洋学の場に出るのは難しいので、どんどんと今日の学問的にむこうの人にわかるように紹介され、どんどん研究を発表されるならば、西洋の学者もそれを理解すると思うのであります。その意味では禅宗を鈴木大拙先生が大変ご研究になってどんどん英文で研究をお出しになり、ちかごろではむこうの人に禅宗を研究する学者が出ておるのなど、よい例であります。私が懇意にしておりますフランスの Demiéville 教授などはつい昨年「臨済録」のフランス語訳を出版されて送って下さったのですが、大変学問的水準の高いものであります。それからまた中国に於ける達磨以前の禅宗、といったものを研究した成果を発表されておられます。だんだん世界的になって仏教研究の分野は広いのであります。

どうぞ皆さん、努力していただきたい。私などはもう老耄いたしまして何もしようがないのですが、お若いかたに期待するところ大なるものがあるわけでございます。大変長こと私の専門でもない聞きかじりの話を致しまして恐縮でございますが、ご静聴ありがとうございました。

法蔵菩薩論

本学教授
文学博士　松原祐善

一

本学の元学長曾我量深先生が八十八才を迎えられ、昭和三十七年十月に東京大谷会館において米寿記念講座が「法蔵菩薩」と題されて行なわれました。まず、大乗の唯識論における八識のお話から法蔵菩薩論に入っていかれたのであります。それが『法蔵菩薩』という題の書物として出版され、仏教の教界のみならず各方面にわたって大きな影響を与え、各種の批評が出ておるのであります。